

校訓について

令和4年度の第2回学校運営協議会において、委員の皆様からいただいた意見をたたき台に、本校の教職員及び市教育長はじめ学校関係の皆様からの意見も参考にし、校訓案を作成した。そして、令和5年度の第1回学校運営協議会において、委員の皆様以案を承認いただき、次のとおり本校の校訓を決定した。

ち しん さ き ひら 稚心を去り己を啓く

「稚心を去り」は、幕末の思想家、橋本左内の「啓発録」における第一訓「稚心を去る」からの引用である。「稚心」とは、子どもっぽい心のことであり、啓発録では何より先に、親への依存心や頑是無い考えと決別することの必要性を説いている。この考えは、開校以来の学校教育目標とした「夢と誇りを持ち、自分らしく主体的に行動できる生徒」となるための大前提ともいえる。

また、本校では、開校以来、第2学年の行事である「立志式」において、この「啓発録」を端緒に、自分の進路や生き方と向き合う活動に取り組んできた。開校期の生徒たちは、ICTの活用や学力向上の取組、ハンセン病問題を一つの柱とした人権学習をはじめ、様々な教育活動の場面で、「楓の誇り」を胸に活躍し、数多の実績を残してきた。このような合志楓の森中学校の黎明期における輝かしい歴史・伝統を継承する上でも、立志式に関連する文言を取り入れたいと考えた。

さらに、「稚心を去る」は、小中一体型校舎で、年少者である小学生とともに学校生活を送る中学生が、年長者として持つべき心得といえる。まさしく新設校設立に当たっての合志市のコンセプトにも通じるものである。

「己を啓く」は、自分がまだ気付いていない未知の次元、あるいはまだ到達していないより高度な次元に自らを導くことを意味している。自分とその未来を変えることができるのは、自分自身である。「己を啓く」の文言から、生徒たちに夢の実現に向け挑戦していくイメージを膨らませたいと考えた。

また、本校は旧菊池医療刑務支所の跡地に建設され、菊池恵楓園に隣接している。ハンセン病問題の啓発に貢献すべく、ハンセン病問題を一つの柱に取り組んでいる人権教育の先進校として、啓発の「啓」の文字を取り入れ、「ひらく」と読むことにした。

さらに、開校期の熊本は、TSMCの進出に象徴されるように、グローバル化進展の真っ只中にある。「Society 5.0」と呼ばれる予測困難な未来社会。その時代を生き抜くために必要な「国際的視野」という視点にも、「己を啓く」は通じるものと考えている。

なお、令和5年度の第2回学校運営協議会において、合志楓の森小学校の校訓も「志高く、道を拓く(こころざしたかく、みちをひらく)」と策定された。どちらの校訓にも「ひらく」という読みの語句があることなど、小中の関連性・連続性が意識されている。

令和6年2月28日

合志市立合志楓の森中学校 初代校長

澁上佳宏